

[研究課題]

抗菌薬投与期間を使った使用密度指標の検討 ―小児病棟を含めた施設間比較―

[研究の概要]

(1) 目的

抗菌薬適正使用の推進は感染対策の重要な課題であり、医療施設において様々な対策が取られている。抗菌薬の使用量を把握することもその1つに挙げられる。

抗菌薬使用量指標として、世界保健機構 (World Health Organization : WHO) の ATC/DDD (anatomical therapeutic chemical classification/defined daily dose : ATC/DDD) システムによる 1 日投与量 (defined daily dose : DDD) を使った抗菌薬使用密度 (antimicrobial use density : AUD) が広く使われている。しかしながら、DDD は成人 1 日投与量を参考とした値であり、小児領域に適用すると AUD を過小評価してしまう。そこで我々は 2011 年度に、延べ投与期間を基にした使用密度指標(pAUD:[特定期間の抗菌薬投与期間の合計]/[特定期間の延べ入院患者数]×100)を定義するとともに、小児と成人病棟間での抗菌薬使用推移や使用パターンの評価を可能とした。今回、使用密度指標(pAUD)を用いて小児病棟を含めた施設間での抗菌薬使用推移の比較検討を行う。

(2) 方法

2011 年 1 月から 2013 年 12 月の日本赤十字社医療センターと成田赤十字病院の入院患者を対象に、注射剤抗菌薬について小児病棟と成人病棟間での使用密度指標(pAUD)を集計し、比較検討する。

(3) 対象

日本赤十字社医療センターと成田赤十字病院の入院患者